

『トム・クルーズとマイケル・フェルプス』

映画俳優として活躍を続けるトム・クルーズは、発達障害をカミング・アウトして活動している数少ない著名人のひとりだ。彼がカミング・アウトしていた障害は「LD(学習障害)」。知的には問題がないにもかかわらず、字が読めなかったり、九九が覚えられなかったり、まっすぐ字を書くことができないなどの困難がある状態を言うが、トムクルーズは字がほとんど読めなかったという。

先日、会議に出かけたのだが、全体会で北海道教育大学准教授北村先生の講義を聞く機会を得た。その中での話である。

耳を疑うとともに、じゃあどうやってセリフを覚えるのか？という疑問が沸く。北村先生が続けた。彼は、子どもの頃から、この障害のためにさまざまな苦勞を強いられてきた。彼の母親は文字を読めない彼に付きっきりで勉強を教えた。映画俳優として活躍するようになってからも、台本が覚えられないなどの困難は付き人のサポートのほか、録音しながら覚えるといったセルフ・サポートを行って、障害を克服してきたという。

トムクルーズが発達障害であることに驚いて、今これを書いているのではない。彼がどう障害を乗り越えて、映画スターになったかに興味があったからだ。

北村先生が紹介した著名人の中にもう一人、私が興味をそそられるスポーツ選手がいた。北京五輪で8冠を達成し、今回のロンドン五輪で通算メダル獲得数を史上最多の22まで伸ばした競泳界の「怪物」マイケル・フェルプス選手(米国)。彼は9歳のときにADHDの診断をされている。

では、彼がなぜ水泳の道に進んだのか？一つはお姉さんもオリンピック候補生になるようなスイマーだったようで、その影響もあって7歳のとき、水泳を始めたこと。もう一つ幸いだったことは、母親がチームプレーの必要なスポーツはこの子には向いていないと判断、個人プレーが可能な水泳を選択したことである。幼稚園の頃の彼は、じっと座ってられない、静かにできない、集中できない子どもで、先生から「あなたの息子は何か集中することはできないのか」と言われていた。

フェルプス選手について、ADHDの基本的な症状から北村准教授は説明する。

多動性がある：じっとしていることが少ない、席についていることができない、多弁であること

衝動性がある：待てない、他児の会話・遊びに介入、大声を出す

これらの症状から、チームプレーができないと水泳選択を判断した母親は賢明だったと先生は語

る。小さいADHDの子どもたちは、つまらなかつたらこうなる。フェルプス少年はいつもじっとしてられなく、疑問に思ったことについての答えを求めていたに違いない。

フェルプスが水泳でオリンピックを目指すことを決意したのは彼が11歳の時、民間水泳クラブのコーチであったボブ・ボウマンとの会話がきっかけであった。フェルプスがボウマンからオリンピック選手になる能力があるということを伝えられた時、即座にフェルプスは、オリンピック・スイマーになるということ、そしてアメリカのために金メダルを取るということを決意したという。オリンピックドリームをこの手で掴みたいと初めて思った瞬間だったと話している。それを受けボウマンは、厳しいトレーニングと他の事を犠牲にして取り組む覚悟が同時に必要であることを諭したという。

ボウマンコーチはマイケルの才能を見抜き、彼の才能を信じた人だ。たった一人でも、自分を認めて、信じて、期待してくれる人が傍にいてくれることで、胸を張って、自分らしく、自信を持って練習に打ち込むことができた。

さて、フェルプスのお母さんについて。彼女は中学校の校長先生、いつでも子どもを暖かく見守っている方で、フェルプスへの接し方についてこう語っている。

「私は命ずるため、指導するためにいるのではありません、私は彼のやりたいことに耳をかたむけ、問題を解決し、賢明な決断を下すように助けようとしてるだけです。」と。

活躍を続けるトム・クルーズ、マイケル・フェルプスの二人には、自分を理解し導いてくれる母がそばにいた。文字を読めない彼に付きっきりで勉強を教えたクルーズの母、そしてチームプレーができない息子と判断し水泳を選択したフェルプスの母。

子育てで大事なことは本人が自ら選んだ、興味のあることをやってみる機会をできるかぎり、与えてあげること。興味があるものが見つかれば、ほっといても、自分で伸びていく。親が子供にやって欲しいことを、いくら押し付けて、無理やりやらそうとしても、お金と時間の無駄ということになるだろう。